

ジョン・ノックスからスコットランドの摂政メアリへ差し出した書簡についての一考察

伊勢田 奈 緒

はじめに

本稿は1556年にスコットランドの宗教改革者ジョン・ノックス（John Knox, 1514–1572）が摂政メアリ（Mary of Guise, 1515-1560）に宛てた書簡とその二年後、新しい序文と増補文を付け加えて、ジュネーブで発行されたものを比較し、その二年間におけるスコットランドにおける情勢の変化とプロテスタント勢力拡大の最中、ノックスの摂政メアリを通してのスコットランドにおける宗教改革への期待が断念へと変化していく様子を詳細に考察したい。尚、ノックスについての研究は多々あり、なかでも女性達の統治が自然や神の意志に反し、正しい秩序の転覆であるとし、彼の攻撃主目標がメアリ・チューダーであった彼の代表作『女達の奇怪な統治に反対する最初の高鳴り』については多く研究対象となってきた。しかし、摂政メアリとノックスの関係を限定して論じてきた先行研究はない。

1. 1556年の書簡と1558年の書簡を出すにいたる経緯

先ず、1556年の書簡についての経緯を述べておこう。1556年の復活節の前後、ノックスはスコットランド各地で聖餐を施行し、信徒を集めた。彼は、当時、プロテスタント貴族の中で最も有力なプロテスタント支持者であったグレンケルン伯に招かれ、エイル州の北、レンフルー州のフィンルストンにも出向いた。さらに5月15日から10日間、毎日二回ずつ、エディンバラで彼は積極的に説教をした。この間、グレンケルンが宮内警護伯ウィリアム・キースを連れてきて、ノックスの説教を聞かせた。ウィリアム・キースはノックスの説教に感動し、さらに摂政メアリにプロテスタントに転向するように手紙を書くようにグレンケルン伯と共に奨めた。当時、摂政メアリとセント・アンドリュース大司教ハミルトンは反目していたので、摂政メアリがプロテスタントに転向する可能性があると思われていた。ノックスもこの意見に賛同し、摂政宛てに書簡を書いたのである。

1558年はノックスの抵抗権を樹立することになったいくつかの書物やパンフレットが出版された年であった。なかでも最初に刊行され、また彼を良い意味でも悪い意味でも評判にした著作が『女達の奇怪な統治に反対するラッパの最初の高鳴り』（以後、『高鳴り』と表記する）であった。これはイングランドのメアリ・チューダーを攻撃目標としたものであり、女達の統治が自然や神の意志に反し、正しい秩序の転覆であるというような抽象的な問題にあるのではなく、女達の統治を論駁することによってスペインとフランスの、イングランドとスコットランドに対する暴政を攻撃し、メアリ・チューダーとギーズのメアリの支配を転覆することにあつた。同年夏には、ノックスは三

つのパンフレット、すなわち、本稿が取り扱っているものであるが、『スコットランドの摂政であるメアリ宛ての書簡（増補版）』（以後、『摂政メアリ宛書簡』と表記する）と、『司教と聖職者によって出された宣告文のゆえに、スコットランドの貴族と身分制度に宛てられたアペレーション』、及び『スコットランドの平民宛の書簡』を刊行した。『摂政メアリ宛書簡（増補版）』は1556年の書簡に序文と増補文数個付け加えた形で1558年7月頃にジュネーブで印刷されたが、これを出すことに決意した理由が「…善なる閣下、私がこのことを思いつき、この嘆願を閣下に示すのは、詳しくある場所で述べ、説明してきたのですが（1556年5月に、スコットランドにおいて閣下へ出したものですが）、すべての公正と公平に反して、私の説く教義のすべては誤っていて惑わせるものであり、異端だとし、私を非常に残酷な火刑に処し、地獄へ落ちよう宣告した司教たちに非常に腹立っているからであります。もし、この危害が私にだけむけられたものなら、私は良心をもって、黙って、見逃すことが出来ましょう。そして、そのために、彼らが非難され、彼らのシナゴグを追い払うようなことで、私は神を祝福し、キリスト・イエスにより神の永遠の社会において迎え入れるということを確認されるでしょう。しかしながら、彼らがキリストの福音について（私を聖職者として用いてくれた神の大いなる慈悲をうれしく思っているのですが）の永遠の真理に反することを激しい勢いで吐き、神を冒瀆していることを考えれば、（もし、神が私の目的を妨げないならばであります）私は肖像画の替わりに、（サタンの一員である）彼らが冒瀆的に非難するあの教義を正当化するため、体を用いようとする、彼らの暴政的で推測される判決を恐れないと貴方様と彼らに知らせることを止めることはできないのです。ところで、私は閣下に次のことを公にします。判決の宣告を行ったり、暴政を行う彼らから、そのことを擁護するすべての者から判断して、私は、合法的な一般議会に訴えます。私は、話すことの自由を必要とします。閣下と王国の体の前で、私の理由が聞かれることを必要とします。私に対してそのような訴訟手続きが行われる前に、私は閣下に証人として怒らずに聞き入れてくれることを求めます。この私の手紙は、閣下に立証するために差し出すものであります。」と序文に述べられているように先ず、司教に対する怒りが要因となっていることがわかる。これは、1556年最初の書簡を執筆した後、7月の半ばに彼はスコットランドを去りジュネーブへ向かったが、その直後に、司教等はノックスに異端の嫌で召喚命令を出し、欠席裁判で彼を異端と断じ、その肖像画を焼いた¹⁾ことに對する怒りによってかき立てられていたのである。さらに、カトリック側の教義を正当化するために迫害をするという暴政に対して、摂政に合法的な議会の場で判決をし、そして意見を述べる場を要望し、またそれに先だって摂政に彼の証しを知ってもらうために書いたことがわかる。さらに、以前書いた書簡を摂政が読み、グラスゴー大司教ジェイムズ・ビートンに向かって「この風刺文をご覧なさい²⁾」と言ったと言われるが、このことをノックスは宮廷人のひとりから耳にしていた。彼は1558年の書簡をスコットランド国家とスコットランド教会の改革への熱き思いをもって摂政へ彼らプロテスタント同志たちの決意を代弁して書いたものと考えられる。

1) The Works of John Knox (ed.D.Laing) I. p.254

2) The Works of John Knox (ed.D.Laing) I, p.252

2. ギーズのメアリが摂政になる過程について

次にスコットランドにおいて、なぜ、フランス人で女性であるギーズのメアリが摂政となったのかを国内、国外状況を見ながら、考察してみよう。メアリー・オブ・ギーズ（仏：Marie de Guise, 英：Mary of Guise、1515年11月22日－1560年6月11日）は、フランスの大貴族ギーズ家の出身で、初代ギーズ公クロードの長女であり、母アントワネット・ド・ブルボン（ブルボン家傍系のヴァンドーム伯フランソワの娘でブルボン朝初代の王アンリ4世の大叔母に当たる。メアリは1534年にロングヴィル公ルイ・ドルレアンに嫁いだが、1537年に夫が死去したため、同じく妻マデリン・オブ・ヴァロワを亡くしたスコットランド王ジェームズ5世と、1538年に22歳で再婚した。当時、メアリの2人の弟、ギーズ公フランソワとロレーヌ枢機卿シャルルは、フランス宮廷で絶大な権力を握っていた。ジェームズ5世と結婚し、スコットランド王妃になったが、スコットランド有力貴族の娘マーガレット・ダグラスとの息子ジェームズ・ステュアート（後のマリ伯）や、他多くの愛人との間の私生児達がいた。1542年12月8日、王女メアリー・ステュアートが誕生した年に起きたソルウェイ・モスの戦いで、ジェームズ5世は死去した。王の遺言状通り、ステュアート家の一族であるアラン伯ジェームズ・ハミルトンが摂政となった。1543年7月1日、イングランドの圧力により、ヘンリー8世の息子エドワード（後のイングランド王エドワード6世）と王女メアリーとの婚約が決められたが、以下のようなスコットランド国内外の事情の中、1554年に、アラン伯の政治手腕が疑問視され始め、ギーズのメアリが摂政となった。

皇太后ギーズのメアリは自身が摂政となる前より、アラン伯に敵意を抱き、両者の確執は次第に強いものとなっていった。1547年の1月28日にイングランドではヘンリー8世が死去すると、エドワード6世の摂政としてサマセット伯エドワード・シーモアらが実権を握った。この年、それまで親英派であったアラン伯が、親仏派であったビートン大司教の説得を受けてカトリックに改宗した。アラン伯の寝返りにイングランド宮廷は激怒し、スコットランドに侵攻した。1547年9月10日、ピンキ・クロウの戦いが起き、イングランド軍の大虐殺によりスコットランドでは1万人以上の死者を出し、なおもイングランド軍による各地での略奪が行なわれた。危険を感じたギーズのメアリは娘のメアリーを連れて、9月11日から18日までインチマホームにある修道院に避難するということもあった。そして1548年には皇太后メアリの提案により王女メアリーはフランスのアンリ2世の元へ預けられ、以後フランス宮廷で育てられることになった。1550年、ブローニュ条約の締結によってイングランドとフランスの戦いが終結するとメアリは反アラン派を結集し、アランを摂政職から解こうと画策し、他方、アラン伯はフランス内に領地を得て、シャートルロ公に叙せられ彼の出身家であるハミルトン家を強化し、メアリに対抗しようとしていた。しかし、メアリ側はフランス宮廷におけるギーズ家の後ろ盾があった。両派の確執のために、スコットランドにおいては異端への禁圧は緩められ、プロテスタント貴族達等の活動は許された。4年間の両者の対立後、アラン伯とスコットランド議会は摂政職をアランからメアリに譲り渡し、政府の要人もフランス人の手に渡ることになった。

3. ノックスの摂政メアリへの期待

前述のようにノックスはウィリアム・キースの勧めによって摂政に書簡を出したということであるが、彼はいったい、摂政になにを期待していたのでろうか？これについては1556年の書簡を考察したい。二年後にはこの期待は落胆になってしまうのだが、まず、彼はそれまで直接に統治者に向けて異議申し立てをしたことはなかったことを念頭にいれておかなければならない。当時のノックスにとって上級権力者に対して書簡を出すことはかなりの覚悟がいったことであろうと想像される³⁾。と同時に、彼はそれまでプロテスタント貴族たちを中心にイングランド信徒やスコットランド信徒に教会の改革やまた迫害に対する異議を唱えてきた。振り返れば、彼は1547年セント・アンドリューズにてプロテスタントの籠城派と共に行動し、やがて彼らの指導者としてカトリック側と抗するようになった。その後、彼はフランス軍の捕虜となって労役に服して以来、フランス、ドイツ、イングランドに亡命するという経験をした。彼は自ら、イングランドや大陸の宗教改革運動を体験することによって、宗教改革運動の成功は、統治者や上級権力者が変わることでなければ、つまり、国家全体を改革するには上に立つものが変わらなければ不可能だと認識するに至ったと考えられる。そのような時、キースの勧めがあり、まず、統治者である摂政メアリに書簡を出すことになったと考えられる。

他方、ノックスは女性には統治権があるのかという問いを抱き続けてきた。たとえば、「チューリヒ回答」⁴⁾ と呼ばれるものがある。これは1554年に彼がスイス旅行中に、スイスの宗教改革者ヨハン・ハインリヒ・布林ガー（Johann Heinrich Bullinger、1504–1575）に、彼が4つの問いを投げかけ、回答を得たものである。すなわち、第一に幼い王の統治の合法性に関するもの、第二に女性に統治権があるのか、また結婚によって、その夫に王権を移譲することは可能か、第三に不敬虔な行政官に服従する必要があるのか、また、高い地位にある人々が武力をもってこれに抵抗することが許されるのか、第四に高位の地位にある敬虔な人々が不敬虔な国王に抗している時、信仰者はいずれの側につくべきか、というものであった。

今、第二の問いに注目してみると、1554年当時、彼はメアリが摂政職につくことを念頭にいていたかどうかは不明であるが、彼はスコットランド女王メアリー・スチュアートがフランス皇太子と結婚すれば将来フランス王がスコットランドを統治し、イングランド女王メアリ・チューダーがスペイン王と結婚すればスペインがイングランドに統治権を及ぼすわけであり、スコットランド人であり、イングランドの説教者であったノックスには非常な問いかけであったと考えられる。布林ガーの回答は女性が服従すべきであることは旧新約聖書からみても明らかであるが、女性が王国の法と慣習に従うならば、女王と認めてよく、彼女が相続権を持っている場合、世俗の法に抗することは危険である。不正な統治を破滅させるためには、主はその目的に適った資格を持つ人々を遣

3) ノックス家はジェントリより下層の出身であろうとされている点からも統治者へ直接、意見することは非常な決意がいったことが想像される。

4) The Works of John Knox (ed.D.Laing) III. p.221–226

わし給う。そして、夫への王権の移譲については、その王国の法と慣習を熟知しているものが、適当な答えを出してくれるであろう、というものであった。

ところで、イングランドでは1553年7月に、一ギーズのメアリが摂政になる前であるがーエドワード六世が没後、メアリ・チューダーが即位し、翌年、ノックスがスイス訪問後、上部ノルマンディのディエップ滞在中に、メアリ・チューダーがスペインのフィリペと結婚しようしていた。またイングランドではプロテスタントに対する迫害を強めていた。一方、スコットランドでは、アラン伯が摂政職を辞し、ギーズのメアリが摂政となり、フランスのスコットランドに対する支配力はいっそう強固なものになろうとしていた。彼は同地で1554年7月、『イングランドにおける神の真理の告白者たちに対する忠実な勧告』を刊行し、メアリ・チューダーとフェリペに対する非難と信仰的勧告を行った。この時点でイングランドとスコットランドに二人の女性統治者が誕生したことになる。

ところで、1556年当時、ノックスの後に『高鳴り』で激しく攻撃しているイングランドのメアリ・チューダーに対する評価と、ギーズのメアリに対する評価は異なっている。さらに言えば、むしろ、摂政メアリに対して期待しているように見られる。56年の書簡ではノックスは「中庸で寛大であり続ける貴方様に信頼し」と述べたり、「来たるべき子孫の時代において、貴方様の政府は幸福で誉め称えられ、貴方様の敬虔なる骨折りは喜びと栄光をもって報われるでしょう」と記している点からギーズのメアリに対する期待は強いものと考えられる。

次に彼が1556年にメアリに書簡を出す判断をしたメアリの宗教に対する政策について検討してみよう。スコットランドのカトリック教会は、第一はカトリック教会の教義の再確認とそれに伴うプロテスタント側の主張の排斥、第二は教会の自己改革の議題のもとに1545年から開かれたトリエンツ公会議での教令に応じて、少しずつ教会内改革に踏み出していた。セント・アンドリュース大司教でアラン伯の兄弟であるジョン・ハミルトンを中心に改革管区会議が開かれ、異端の発生の厳禁は聖職者のモラルの墮落と腐敗した生活に基づくとし、1552年に「ハミルトンの教理問答」が作成された。しかし、これはほとんど実行されず、プロテスタントは依然として異端であって異端者は死罪に処せられることになっていた。しかしながら、メアリは摂政就任後、カトリック貴族を排し、プロテスタントに好意的な貴族やレルドに依存し始めた。彼女はかつて、セント・アンドリュース城で籠城派として戦い、フランス軍の捕虜となったジェントルマン達を釈放し、復権させることによってその役割を担わせた。メアリの寛容さがスコットランドにおけるプロテスタントに拡大の機会を与え、1547年以降、亡命していた説教者たちも帰国し始めた。当時、フランクフルトにおいて英国人教会の牧師であったノックスも1555年、一時であるが、帰国している。

彼が1556年の時点で、摂政に期待したものは彼女自身がプロテスタントへ改宗し、スコットランド国家における宗教の改革であったと言えよう。彼は書簡で彼女に対して、国民を「母のように」愛するように促し、また、「殺人者たちや圧制者たちに反対するのに用いられるための曲がらない正義と」、「強欲や不公平のない心と、王国や国家の維持に熱心で注意深い心」と、「諸々の徳をもつ」統治者を期待している。また、書簡の中で「…貴方様は恐らく、宗教の監督は、上級行政官た

ちに委ねているのではなく、彼らがそれを称しているように、司教たちや聖職者階級に委ねられているとお考えでしょう。しかし、貴方様ご自身、誤解してはなりません。というのは、司教たちが怠慢なため、誤った判断で弾圧を必要としているのです。実はそのために行政官の手が必要とされているのです。なぜなら、彼らはあらゆることに、不正に促進し、助成し、維持しているからです。偽りの不正な判断により財産は奪われ、庶民の体は虐げられています。しかも、高慢な高位聖職者たちは、その者たちのためにキリスト・イエスが血を流されたのに、その者たちを王達に殺させ続けているのです。そして、彼らは命の真の御言葉を阻止したり、あるいは、今ローマ・カトリック教会で教えられているような有毒な教義を教え込もうとしたりしているのであります。」と先ず、摂政にカトリック教会の墮落した現状と統治者たちは腐敗した高位聖職者たちに利用されて操られ、庶民を虐げてきていると訴え、宗教の監督がうまく機能していない現状を示している。そして彼は旧約聖書の宗教改革を行った支配者であるヨシア、ヒゼキヤ、ヨシャファトを例にあげながら、摂政メアリに真の宗教を管理する義務があることを示唆している。そして、同時に彼はメアリに丁寧に、そして敬意を払いながら、強く公の改革の必要を訴えている。すなわち、「閣下は急いで、迷信を廃止することはお出来になれないでしょうし、無駄な主任司祭を職務から取り除くことはお出来になれないでしょう。」とし、「しかし、もし、閣下のお心に神への賛美が強くおありでしたら、」と摂政に気遣いながら摂政が、「邪悪な法による偶像崇拜を維持することも」、「過去の時代において、習慣化してきたように、キリストの体である哀れなメンバーたちを殺したり、むさぼり食べたりする司教たちの激怒に苦しむ」必要もないとする。そして手紙の最後は摂政への期待を声を大にして訴えている。すなわち、「神に従い、悪魔や、暗闇、プライドや迷信の統治者に対して闘う人間は如何に危険であることか！もし、閣下が、ご自身が楽しむことを望み、今もまた永遠に名誉を持ち続け、全能の神のご支配の下、貴方様ご自身を時代に仕えるならば」、摂政が「神の御旨を受け入れて」くれることを切望する。ノックスは神の福音書を見下して、むなしい意見に盲従することがないように忠告し、そして、教会は罪を犯してはならないことが肝要だと言うことを説き、生活において、キリストの真の使徒たちから墮落し、宗教においてもさらに墮落している者たちに福音が説かれるようにしてください。」とし、公の宗教の改革がなされることによって、メアリは二重の祝福をもつことになり、すなわち、「この世の統治において、知恵と富と栄光と名誉と長寿をもって」報い、そして、「永遠に続く命を持って」、王の中の王であるキリストが、現在のメアリの統治を評価してくださる」であろうとした。最後に「わたしたちの主イエス・キリストの父である神は、聖霊の力によって、貴方様の心を動かし、彼らが貴方様の正当な有罪の決定の証言ではないと言った事柄を考慮し、受け入れさせ、そして、全能なる神、主イエスの裁きの日には、私は、閣下に誠実にお委ねします。」と丁寧に述べている。この書簡では、ノックスは、かつて、ブリンガーに問うていた女性の統治者問題があったにもかかわらず、摂政に対して好意的であり、また、摂政が公の宗教の改革に乗り出してくれることを期待していることが窺える。

4. 1558年書簡の分析－メアリへの助言とノックスの決意－

次に1558年の書簡を中心にしながら、1556年から1558年までの間に摂政を取り巻くスコットランドの情勢の変化と、ノックスが摂政になにを助言し、彼は何を決意したのかを考察してみよう。

まず、この二年間の間のメアリの統治におけるスコットランドの情勢をみると、先ず、メアリは前摂政であるアラン伯からの財政赤字を引き継いでいた。フランスからの資金は不規則であり、スコットランドにおける防禦にかかる費用、すなわち、要塞建設費用、ならびにフランス軍駐留の兵士への給料に莫大な費用が必要であった。そこで莫大な税金を徴収する決議と共にメアリは援助金を求めて教皇に接近した。彼女は修道院が非常に裕福であるのにあまり役立っていないことを王室に教会財産を処理する権限を与えてくれるように懇願したがこの提案に教皇は乗り気ではなかった。しかし、教皇から1556年と1557年に教会収入の20分の1をスコットランドへ与えられることになった。さらに、1556年、新しい査定に立って恒久的な税金の徴収が計画された。これは、あらゆる土地の旧査定だけでなく、すべての者の氏名ならびに、各自の性格と能力、および彼らの財産と動産、不動産の量をも財政長官に報告すべきという査定であった。この税徴収は国民の不平、不満となった。しかし、娘メアリ女王の結婚費用のため、また兵士への給与、要塞のための費用に課せられた新査定の下、強制的な税徴収は続いた。摂政自身も節約を試み、たとえば、金銀製食器類を犠牲にしたり、フランスにいる娘随員の維持費を補うため自分のフランスの年金を手放すということも行った。とにかく、財政的困難と増税に対する国民の不満が摂政を苦しめていた。1557年にメアリは、ボスウェル伯をスコットランド国境のハーミテージの指揮官に任命した。ボスウェル伯は、当時スコットランド国境から絶えず侵入を繰り返し、人々を恐れさせていたイングランドの軍隊の掃討に、目ざましい働きを見せていた。以上のように、この頃の摂政は防衛とフランスとの関係、そして財政問題に苦慮していた。

一方、この間、プロテスタント勢力は拡大していた。1557年12月3日、アースキン、アーガイル、モートン、グレンケアンらのプロテスタント貴族は、プロテスタントの布教を目的にコモン・バンドを結成した。その「イエス・キリストを告白する貴族とバロンたち」は、協議の結果、王国内のいずれの教区教会においても、日曜日毎にエドワード六世の共同祈禱書を朗読し、また私宅における説教と聖書の研究を行うことを決議した。1558年末には、プロテスタント貴族達は「会衆」と自称すると、スコットランドの政治・宗教上の改革と、スコットランド全土におけるプロテスタント教会の設立を要求した。彼らの真の目的は、国内のカトリック勢力を打倒し、カトリック教会の財産を手中にし、メアリに入れ知恵をする邪魔なフランス人を駆逐することであった。1558年初めに、ダンディーなどの地域で信徒達の一般選挙によって教会規律を実施するための長老が選出されるなど、公的な宗教改革が成立する前に、秘密教会が出来ていった。プロテスタント貴族達は15歳で女王メアリと結婚したフランス皇太子のために配偶者王位継承権の獲得をもくろむ摂政メアリを利用することも手伝って、プロテスタントの勢いが徐々に進展していった。

1558年4月24日、ノートルダム大聖堂で、摂政の娘メアリはフランソワと結婚式を挙げた。摂政

はスコットランドを離れる事ができなかったので、母アントワネットを娘の婚姻契約を結ぶための代理として派遣した。同年4月28日にはダルサイトの教区で子どもたちに聖書を教えていたことで、教区司祭に捉えられ、大司教ハミルトンのもと、セント・アンドリュースで火刑に処せられた。処刑後、プロテスタント貴族等は、摂政メアリに抗議し、彼女は彼らに遺憾の意を表明したが、ハミルトンを処刑にすべきという貴族達の要求に対してはなんの手も講じなかった。言い換えれば、摂政メアリが自分の娘の結婚式に出席できなかったこと、またカトリック教会に対しても、プロテスタント勢力に対しても、意見することもあまり出来ない状況から、摂政の統治権力がかなり悪化していることが窺える。

上記のようなスコットランドの情勢であったが、この二年間のノックスの活動についてみると、1556年、一時帰国していたスコットランドから再び、ジュネーヴへ行き、12月にはジュネーヴにおけるイングランド人教会の牧師（彼は1555年12月にジュネーヴのイングランド人教会の牧師に再選されていた）に再選され、1557年にも三選し、ジュネーヴで牧会をしていた。その間、フランスのパリのサン・ジャック街事件に関与することになる。この事件はサン・カンタンがスペイン軍、イングランド軍によって陥落した直後の1557年9月4日に約400名のフランス・プロテスタントが、パリのサン・ジャック街の一私人拓で礼拝を行っていたとき、カトリックの民衆がこの私宅を襲撃した事件であった。プロテスタント信奉者たちは投獄され、一部が処刑された。ノックスはスコットランドにこの事件を知らせるために、『弁明⁵⁾』を執筆した。そして、1558年、彼の抵抗権に関する4つの論文が発表されることになった。

その一つが本稿の1558年の摂政メアリあての書簡である。56年版は初めて、ノックスが直接に統治者に宛てた書簡であり謙虚と尊敬を払いつつ、また、摂政がスコットランドの改革への関心と実施の可能性を期待してしたためたものであったが、1558年の書簡は単刀直入に、摂政メアリを通じての改革を断念したことや上級行政官に対して抵抗する権利について論じているものになっている。

1558年の書簡ではまず、イングランドで行われているメアリ・チューダーについての迫害について切り出す。すなわち、「貴方様は、時々、フランス、イタリア、スペイン、フランドル、そして遅れて今やイングランドにおいても、キリスト・イエスはこの世のただ独りの救い主であり、神と人との唯一の仲保者であり、すべての信仰者の罪を受け入れ、唯一、犠牲となり、ついには神の教会の唯一の頭であることを告白した人々が極めて残忍に殺されていることを知らないわけではないでしょう。さらに私はこれらのことを申し上げたい（貴方様はその噂を聴いておられることでしょうか）のですが、貴方様は、スコットランド王国内でも同じ理由で、幾らの者たちが殺されてきているのを目の当たりにして、この理由を無関心で聞かないということは決してないと思います。」と述べる。そして「高位聖職者たちや司祭たちのおそろしい不正やごうまんな生活は彼らが統治しているすべての王国を汚し、彼らは、彼らの父祖、ファリサイ派の人々と共に知識の鍵を取り去り、人々の前で天の国を閉ざすのです。そして、彼らは天の国に自分が入ろうとしないばかりでなく、

5) これは1557年4月に『パリで獄に繋がれているプロテスタント達のための弁明』として執筆された。

入ろうとする他の人びとも許さないのです。人々はある者は無知のため、ある者は恐れのため、略奪の側での非常な貪欲さのため（キリストは十字架にかかり、兵士たちは彼らの中でキリストの衣服を分けましたが）、目が見えず、キリスト・イエスに反抗し、キリストの哀れな群れに反対し、高慢で有害な殺人者である高位聖職者を守ることに協力するのです。」と述べてカトリック聖職者達の不正を示し、同時に、一般の国民はこれに抗することが出来ず、服従せざるを得ない現状を記す。また、ノックスは「もし、貴方様がこれを否定なさるなら、キリストの敵に（キリストの教義を異端として宣告する）耳を与えることになり、貴方様は、彼らと共に神の復讐の杯を飲むことになりましょう。」と不正のカトリック聖職者たちのしていることを許すなら、彼らと同じように神から裁かれるとして、摂政に対して訓戒している。さらに、彼はメアリの信仰のあり方についての再考をするべきだと、さもなければ、キリストを崇拜していないことになるとし、56年の書簡とは比べものにならない程、高圧的である。すなわち、「私は貴方様のために泣きます。それは、王妃たちや目の見えない教皇主義者たちが火と剣をもって維持するその宗教は、キリストの宗教ではありません。そして、貴方様の高慢な高位聖職者たちのうちには、キリストの司教たちである者はだれもいないのであります。私は、貴方様に、キリストの群れが彼らによって圧迫されていることをお知らせ致します。そして私は、主なるイエスの名において、再び貴方様が、私が公平に説教をしたり、判断したり、論じたりすることを聞き届けられることを心から望みます。もし、このことを貴方様が否定するのでしたら、貴方様ご自身は、キリストを崇敬していないのであり、キリストの真の宗教を愛していないのだと宣言していることであります。」と示唆している。また、服従の問題について、次のように語っている。「たとえ君主がそれほど強力ではないとしても、その命令に対して、人は偶像崇拜を行い、神が神の御言葉によって賛成していない宗教を受け入れ、あるいは彼らの沈黙によって、邪悪で神を冒瀆する法が神の名誉に反してなされたことを認めるということは、神に反することであると私は言いたい。人々は、真の服従を言い表しているのではなく、彼らが神の背信者であるように、彼らは、お世辞によって、神に反対して、反抗することを断言する彼らの支配者に対する反逆者たちなのです。ただ、死ぬまで、悪しき法律と命令に対して、抵抗する人々のみが、神に受け入れられ、君主達に対して忠実な人々なのです。」と。ここでは偶像崇拜と邪悪な法に抵抗する者が神に受け入れられ、支配者に忠実な者であることを述べ、「私が悔い改めについて話すとき、見せかけの神聖さを示すではありません。それは、普通、偽善者に見いだされますが、しかし、私が意味するものは、貴方様の権力を維持させ、守られるために、貴方様が、その中で養われ、そして貴方様を美しく見栄えあるものにしてきた、迷信や偶像崇拜の一切を呪いつつ、貴方様の心全体から主なる神に真に改心していただくことなのです。」としてメアリに真の宗教への改心を説いている。ここでは1556年における書簡でのノックスの摂政への期待感はほとんど無く、ただ個人として改心を迫っているように思われる。さて、かつて、ブリンガーへ問いかけた四つの問いのうちの、第二の問い、「女性に統治権があるのか、また結婚によって、その夫に王権を移譲することは可能か」について、ノックスは大胆にもメアリに問いかけている。すなわち、「私は、貴方様の権能は、特別に不安定に、ただ借りておられるにすぎないと思うのであります。

というのは、貴方様が、それをただ他の人々の許しによって、持っているに過ぎないからであります。そして、滅多に女性たちが至福と喜びを持って、長く国を支配するということはないことだからです。なぜなら、自然は女性たちに良い政府が変わらず続く風潮を与えないように、神は、女性が男性を支配することを決して、認めず、激怒と憤りを発してきたのです」として、女性による国家の統治は自然に反するものであり、神の意志に反するものであるとする。そして個人の宗教の改心とは別に摂政メアリの統治に対して、女性の統治という点から異議を唱える。さらに、メアリの二人の息子は1541年4月に突然、数時間内に亡くなり、夫のジェームズ五世も1542年12月に亡くなっていることについて、女性が彼らの父祖の名誉を受け継ぐことを許してきたことが原因であり、そのことに神は怒った結果であるとする。そして彼は最後に、「私は、キリスト・イエスの名前において、貴方様が維持している宗教は呪うべき偶像崇拜であることを確信するようになりました。そして、私自身、神の聖書の最も明らかな証明によって言えることを申し出たいのであります。この反目の中で、私は王国内のすべての教皇主義者たちに反対することを表明いたします。私が望むことは、神の聖なる言葉と私が語る自由にほかならないのであります。」と記し、メアりに邪悪な聖職者たちに対して断固として抗することを決意したことを表明している。以上、ここではもはや、ノックスは摂政への期待は失せてしまい、偶像崇拜者で暴政を行っているカトリック側に対して強硬手段に出る覚悟が見られる。

5. 結語

本稿では、これまで1556年と1556年のジョン・ノックスが摂政メアリに宛てた書簡について考察してきた。スコットランドでは1559年、ジュネーブから帰国したジョン・ノックスを中心にプロテスタント貴族達が摂政メアリ軍と宗教改革戦争を始め、同年10月、会衆によって、ギーズのメアリの摂政食停止宣言がなされた。翌1560年に、宗教改革戦争が終結した。宗教改革議会が成立し、ついにスコットランドにおいて教会の改革が着々に行われることになる。これら一連の出来事を考慮していくと1556年から1558年は宗教改革への準備の期間であったと考えられる。また、この2つの書簡を比較してみると、摂政の宗教の寛容策はプロテスタント勢力伸長へのプラスとなり、また、摂政のプロテスタントに対してもカトリックに対しても無策であったことに乗じて、両者は互いに過激になっていったように考えられる。また、ノックスは改革への摂政に対する期待は彼女の寛容さと煮え切らない態度にやはり、女性統治者に対する失望を強めていったように思われる。さらに、統治者、上級行政官などの上に立つ者への抵抗の可能性に対して（彼の抵抗論であるが）検討を深めていることも窺える。以上、ノックスの摂政への2つの書簡は、急激な変化を遂げているスコットランドにおける宗教改革運動の進捗を知ることができ、非常に有益な史料であることが明確になった。

【尚、本稿中の1556年、および1558年の摂政宛ての書簡は拙訳である。】

(一次史料)

Letter to the Queen Dowager, Regent of Scotland (Augmented Version) 1558, Geneva (STC nos.15067)

David Laing (ed.), *Selected Writings of John Knox*, Edinburgh, 1846, p.439-470

伊勢田奈緒（訳）、ジョン・ノックスによる宗教改革文書(1)—1556年に神の御言葉の牧者であるジョン・ノックスからスコットランドの摂政メアリーへ差し出した書簡と1558年著者によって補足説明された文書(1)—「環境と経営」第20巻1号（静岡産業大学）2014年6月，119～126頁

伊勢田奈緒（訳）、ジョン・ノックスによる宗教改革文書(1)—1556年に神の御言葉の牧者であるジョン・ノックスからスコットランドの摂政メアリーへ差し出した書簡と1558年著者によって補足説明された文書(2)—「環境と経営」第20巻2号（静岡産業大学）2014年12月

(参考文献)

飯島啓二『ノックスとスコットランド宗教改革』、日本キリスト教団出版局、1976年

今井宏（編）『イギリス史』、山川出版社、1990年

久米あつみ（訳）『宗教改革著作集』第9巻、教文館、1984年

出村／丸山／飯島（共訳）『宗教改革著作集』第10巻、教文館、1993年

浜林正夫『イギリス教会史』大月書店、1987年

八代／中村（共訳）『宗教改革著作集』第12巻、教文館、1984年

八代崇『イングランド宗教改革史』聖公会出版、1993年

G. ドナルドスン『スコットランド絶対王政の展開』飯島啓二（訳）、未来社、1972年

Agnes Mure Mackenzie, *The Scotland of Queen Mary*, Edinburgh, 1957

Andrea Thomas, *The Court of James V of Scotland*, Edinburgh, 2005

Brown, P. H., *John. Knox. I*, Edinburgh, 1905

Gordon Donaldson, *The Scottish Reformation*, Cambridge, 1960

G. Barnett Smith, *John Knox and the Scottish Reformation*, London

Ian B. Cowan, *Regional Aspects of the Scottish Reformation*, London, 1978

Rosalind K. Marschall, *Mary of Guise*, Edinburgh, 2001

Rosalind K. Marschall, *John Knox*, Edinburgh, 2000

Pamela E. Rirchie, *Mary of Guise in Scotland*, East Lothian, 2002

Roger. A. Mason (ed.), *John. Knox. and. the. British. Reformation*, Aldershot, 1998

Roger. Mason (ed.), *John. Knox: On. Rebellion*, Cambridge, 1994

